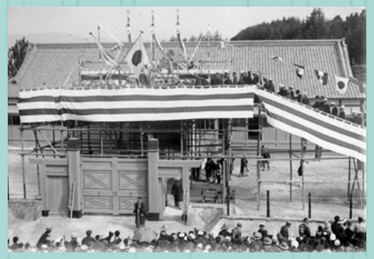
小樽市公会堂
小樽市能楽堂

ご案内とご利用のしおり

小樽市公会堂

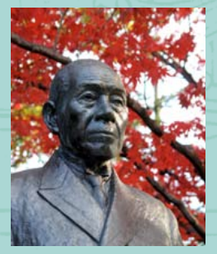
【沿革】

明治43(1910).12月　藤山要吉氏より小樽区へ建物寄付願
明治44(1911).1月　現市民会館敷地内にて工事着手
明治44(1911).7月　工事完了、同8月皇太子行啓
昭和21~24(1946-49)　終戦後の海外引揚者を収容
昭和27(1952).7月　淡交会小樽支部より茶室寄付
昭和29(1954).7月　岡崎 謙氏より能舞台寄付
昭和35(1960).10月　現在地への移転工事着手
昭和36(1961).9月　能舞台を含む拡張移転工事完了



【上棟式】明治44年6月24日に行われた上棟式の模様。（小樽市総合博物館所蔵）

【皇太子出門時の光景】明治44年8月25日午前10時22分、皇太子は公会堂を出門し札幌に向った。（小樽市総合博物館所蔵）



【藤山要吉像】昭和33年6月建立。2007年9月に修復され輝きを取り戻した。（撮影:2007年11月）

【公会堂全景】昭和8年以降。（市立小樽図書館所蔵）

【公会堂風景】大正後期。（小樽市総合博物館所蔵）

公会堂誕生の経緯

明治44年（1911）の皇太子（後の大正天皇）の北海道行啓に当たり、道内各地で御旅館の新築、あるいは既存建物の整備が行われた。小樽区においては、海運業はじめ開墾、漁場、鉱業、銀行等の事業を経営していた藤山要吉氏によって、公会堂を兼ねる御旅館が花園公園内（現・市民会館敷地）に新築される運びになった。これは藤山要吉氏自身の発案によるものであった。

藤山要吉氏の略歴

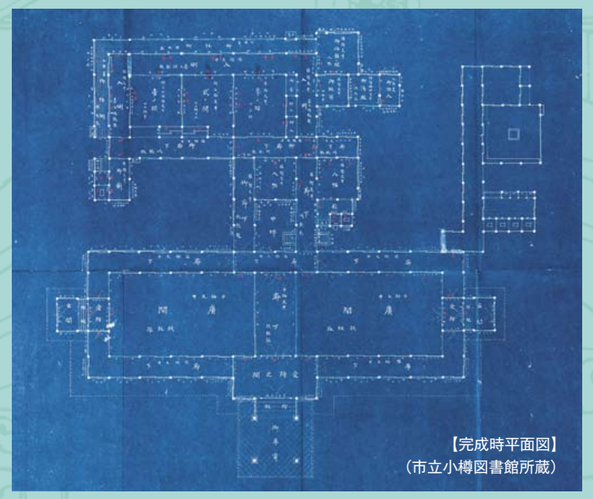
藤山要吉氏は嘉永4年（1841）、羽後国（秋田県と山形県の一部からなる当時の行政区）の古谷家に生まれ、17歳で松前の回船問屋に奉公し、明治5年（1872）に小樽の大十中村という問屋に奉公先を変えている。その後、小樽市信香町で回船問屋を営む藤山重蔵氏に見込まれて同家の養子となり、明治11年（1878）に養父の死にともない家督を相続し、和船二隻から海運業界に乗り出す。事業は順調に展開、明治20年（1887）には天塩漕運株式会社を創立して小樽・稚内間の航路を切り開いた。海運事業にとどまらず、道北の漁場経営にも力を注いでいたが、多くの漁場をめぐる必要性もあって、明治27年（1894）に当時としては最先端の輸送機関である汽船・小樽丸を新造、これを契機に明治40年代には汽船10隻余りを有して日本海運業界屈指の存在となり、小樽有数の資産家として知られる存在となった。

建物の設計から寄付まで

施主・藤山要吉氏は建築工事を大虎・加藤忠五郎氏に依頼、これを大いに光栄とした加藤忠五郎氏は明治43年（1910）11月に自ら宮内省に出向き、宮内省技師・木子幸三郎氏に指導を受けている。同年12月に藤山要吉氏から小樽区長へ建物寄付願が提出され、翌明治44年（1911）1月に建築工事に着手、7月末に竣工した。8月23日午後6時20分、予定通りに皇太子が御旅館に到着し、24日は小樽区内を行啓、25日午前10時22分に公会堂を出門して札幌に向った。この後、9月25日に藤山要吉氏から小樽区長に引継書が提出され、正式に寄付の運びとなったのであった。

【建築工事の光景】工事は明治44年1月に着工した。（小樽市総合博物館所蔵）

【完成時の公会堂内部】上:本館広間、下:御殿三の間。（小樽市総合博物館所蔵）



【完成時平面図】（市立小樽図書館所蔵）

建物の概要

建物は、主に本館（正面側）と御殿（背面側）からなり、和風建築の様式でまとめ、総建坪は約267坪であった。本館は平屋建で入母屋屋根の正面中央に千鳥破風を据えて瓦葺きとした。車寄は三方を吹き放ち、屋根を唐破風とする。本館の居室は廊下を挟んで広間を左右相称に配した。御殿は「一の間」「二の間」「三の間」の3つの和室からなり、当初は杉皮葺きであったが後に銅板葺きに変えられている。武家屋敷風の塀重門と生け垣に囲まれた趣あるその風姿は花園公園内にあって異彩を放っていた。御殿は後の行啓の都度、休憩所に充てられ、本館は公会堂として使用されていたが、戦後、外地からの引揚者の一時収容所となってからは、全館が公会堂として一般に供されるようになった。

移築

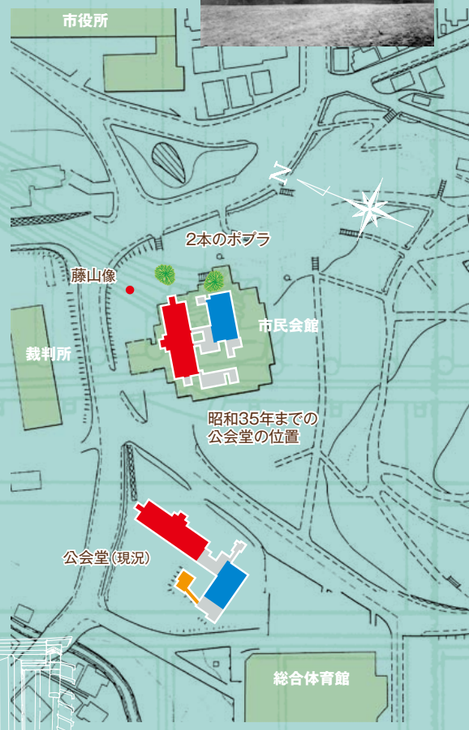
昭和35年（1960）に市民会館建設のため約50m離れた現在地に曳家によって移築することになったが、その際、移築地が大きな高低差があることもあり、外観は保存されたものの、基礎部分に大幅な改変が施されたほか、本館と御殿との配置関係も並列から鈎の手状に変更された。昭和36年（1961）の移築拡張工事完成時には、岡崎邸能舞台を一体的に組み合わせた。

忘れられた神鹿像と藤山氏像

移築前の昭和33年（1958）に公会堂敷地内に藤山要吉氏の銅像が建立され、現在も市民会館正面左横にそのまま立っている。実は藤山要吉氏像がある同じ位置に、長さ150cmにもおよぶ神鹿像が公会堂創建時から存在していた。それは藤山氏と親交のあった福山の吉田三郎右衛門氏が、藤山氏の資財美学に感激し、皇太子の台覧に供したいと寄贈したもので、神馬のように鞍と手綱を付した鹿の銅像であった。残念なことに戦時中に供出され、その姿は幻となってしまった。

【御旅館奥庭】明治44年。（小樽市総合博物館所蔵）

【2本のポプラ】明治44年、海側から。ポプラは現在も健在だ。（小樽市総合博物館所蔵）



【完成時立面図】（市立小樽図書館所蔵）

【神鹿像】大正9年、小樽月六題と題する記念葉書の1枚。（小樽市総合博物館所蔵）

【参考文献】
・日本建築学会北海道支部研究報告集No.62「小樽区公会堂について（1）（2）」駒木 定正著
・「藤山要吉翁小伝」倉内 康次著

小樽市能楽堂

【沿革】

大正13(1924)	佐渡産神代杉、九州産檜他を調達
大正14(1925).7月	自邸新築とともに能舞台建築に着手
大正15(1926).1月	竣工、同月舞台開き開催
昭和2(1927).11月	狩野秉信(もちのぶ)により鏡板の松竹の絵完成
昭和24(1949).6月	野口兼資(かねすけ)来道記念能開催
昭和29(1954).7月	岡崎 謙氏より能舞台寄付
昭和36(1961).8月	舞台解体、同9月現在地へ移転
昭和60(1985).7月	小樽市指定歴史的建造物

【神代杉の搬出光景】大正13年10月に佐渡国羽茂村大字大崎字角満沢から掘り出した神代杉の搬出の光景。川に流して運んだ。(岡崎家写真帳)

【岡崎家の狩野秉信】昭和2年秋、狩野秉信は2ヶ月のあいだ岡崎家に滞在し、鏡板の松と竹、揚幕部板戸の唐獅子の絵を書き上げた。「春または秋の中正気温の時期に揮毫せり」との記録がある。(岡崎家写真帳)

【岡崎邸内の能舞台】昭和初期。(岡崎家写真帳)

【見所の配置と内部】見所の欄間や障子に能のモチーフをぜいたくに用いるなど、能の幽玄な世界に誘う空間創造が工夫されていた。(岡崎家写真帳)

小樽市能舞台は、岡崎謙氏が小樽市入船町の自邸内に建てた能舞台であり、岡崎謙氏没後、小樽市に寄贈され現在地に再建されたものである。

岡崎謙氏の略歴

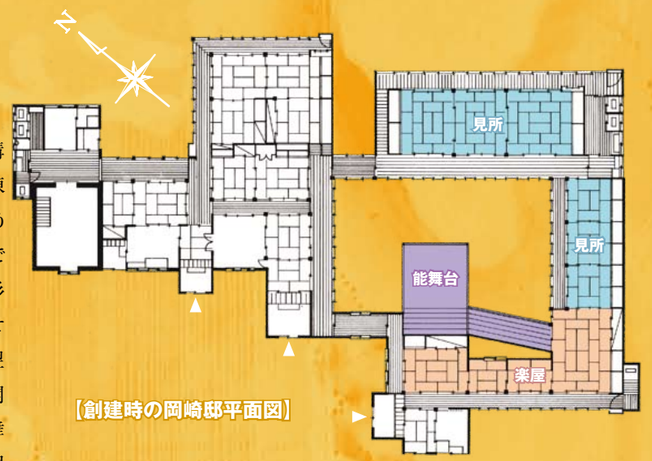
岡崎謙氏は明治10年(1877)、新潟県佐渡郡三川村(現・羽茂町小泊)生まれ。7歳の時に父は小樽に渡って卸問屋を営んでいたが、明治21年(1888)に父の住む小樽に移住、明治23年(1890)に上京して東京英和学校(現・青山学院大学)と東京高等商学校(現・一橋大学)で学んだ。上京中に宝生流の波吉門下について能を習い、能に深く傾注したという。明治32年(1899)、父の死去により家業の荒物卸と倉庫業を継ぐとともに、小樽区会議員、小樽市議会議長を歴任、大正7年(1918)には学資困窮生徒のために育英事業を興している。

岡崎邸と能舞台の建設

岡崎謙氏は自邸の新築とあわせて能舞台の建築を構想、事前に東京の芝能楽堂(現・靖国神社能舞台)を棟梁と連れ立って調査に出向くとともに、故郷の佐渡で掘り出した直径2mを越す神代杉(じんだい)(水土中に埋もれた杉で特殊な材色を放つ)や、九州産の桧を調達した。神代杉の運搬には舟1隻を借り切り、木挽(こびき)も佐渡から呼び寄せた。そして大正14(1925)年7月に建築工事に着手、翌15(1926)年正月に完成させ、同年1月26日には舞台開きを催している。居宅部分は正面左手の北西側に、能舞台・見所(けんしょ)(客席)・楽屋が右手の南東側に配置され、合理的な機能分けが整うと同時に、舞台から正面見所を通して海を遠望する効果的な演出も生まれた。岡崎謙氏自身、能舞台、見所、楽屋が一体になった演能のための施設全体を「小樽能楽堂」と呼称していた。邸宅の中庭に見所に囲まれ建てられた能舞台は全国的にもきわめて稀少な例とされる。

【神代杉】掘り出しだ神代杉の直径は2mを越した。(岡崎家写真帳)

【能を舞う岡崎謙氏】謙氏は能の名手でもあった。(岡崎家写真帳)



【創建時の岡崎邸平面図】

岡崎邸能舞台の価値

大正15(1926)1月の能舞台の完成からおよそ1年半後の昭和2(1927)年秋、狩野派第17代狩野秉信(もちのぶ)を京都から呼び寄せ、2ヶ月をかけて鏡板の松と竹、揚幕板戸の唐獅子を描かせ、同年11月12日には揮毫(きごう)記念能が開催された。鏡板の揮毫が狩野派によるものであること、能舞台の構成が、屋根は入母屋造り、二軒(ふたのき)、柱頭の組み物は出三斗(でみつど)、蟇股(かえるまた)は各辺に2個の計8個なっていることなど、岡崎邸能舞台は江戸時代に定められた能舞台の最高の基準を備えている。江戸幕府大棟梁の家柄であった平内(へいのうち)家の5巻からなる『匠明(しょうめい)』中の「舞台」の記述とも合致点が見出され、伝統的な能舞台建築形式にもとづくことが確認されている。

演能の歴史

岡崎邸能舞台では中央から多くの賓客を迎えて催事が行われた。昭和3年(1928)に徳川喜久子(後の高松宮妃)、同6年(1931)に貴族院議長の徳川家達、同9年(1934)に宝生重英(宝生流17世宗家)らを迎えたほか、昭和24年(1949)には幽玄能の世界では不世出の名人といわれた野口兼資(かねすけ)もこの舞台で「松風」を舞っている。

移築再建

能舞台は岡崎謙氏没後の昭和29年(1954年)、その遺志により小樽市に寄贈された。しばらく岡崎邸内にあって演能も行われていたが、昭和36年(1961年)に公会堂の移築拡張に伴い現在地に再建された。

昭和60年(1985)に公会堂とともに小樽市指定歴史的建造物に定められ、平成5年(1993)から一般に公開されている。

【参考文献】
・「旧岡崎邸能舞台の近代和風建築としての意義」駒木 定正著
・「能楽堂の建設と小樽の覚醒」佐藤 繁夫著
・能に親しむ会 会報「能と狂言」No.11
・「小樽の建築探訪」小樽再生フォーラム編
・「小樽市の歴史的建造物」小樽市教育委員会

【小樽市公会堂と小樽市能楽堂の建築データ監修: 駒木 定正】

【岡崎邸能舞台の演能~『杜若』】大正15年7月18日、金子禎吉還暦能。(岡崎家写真帳)

【岡崎邸能舞台の演能~『草紙洗』】昭和6年7月18日、宝文会大会、主ツレ: 岡崎謙氏。(岡崎家写真帳)

【『松風』を舞う野口兼資】岡崎邸能舞台にて、昭和24年6月26日。野口兼資(1879-1953)はシテ方宝生流能楽師、幽玄な芸風で知られた。(岡崎家写真帳)

【鏡板の老松(左)】【揚幕(あげまく)部板戸の唐獅子(右1)、鏡板側面の竹(右2)】いずれも2007年6月撮影

華麗なる能装束

2006年5月、岡崎家より同家所有の能装束など13点611品が小樽市に寄贈されました。唐織（からおり）、厚板（あついた）、狩衣（かりぎぬ）、法被（はっぴ）、側次（そばつぎ）、長絹（ちょうけん）、水衣（みずごろも）、垂直（ひたたれ）などの上着類55着、縫箔（ぬいはく）などの着付類21着、袴10着、その他、扇子類97本、謡曲本等356冊あまり。これらは順次、小樽市公会堂地下1階展示室で公開されています。

ご利用のご案内

＊ご利用のお申し込みは、ホールは12ヶ月前から、集会室等は6ヶ月前から受け付けます。

＊休館日は12月29日から翌年1月3日までです。

＊ご利用の詳細は市民会館（TEL:0134-25-8800）にお問い合わせください。

【ホール】

【1号室】

【3号室】

【2号室】

【和室・竹、梅】

公会堂使用料金表

（下段は暖房料金／単位：円）

室名 ＼ 時間区分	午前 9:00~12:00	午後 13:00~17:00	夜間 18:00~22:00	全日 9:00~22:00
ホール(237.6m²)	3,900 1,530	5,000 1,840	6,300 1,840	13,000 5,210
1号室(115.5m²)	1,900 1,120	2,400 1,380	3,100 1,380	6,400 3,880
2号室(59.4m²)	900 360	1,200 460	1,600 460	3,300 1,280
3号室(138.6m²)	2,300 1,120	3,000 1,380	3,700 1,380	7,700 3,880
和室・寿(畳8帖)	700 360	1,000 460	1,200 460	2,600 1,280
和室・松(畳15帖)	500 360	700 460	900 460	1,900 1,280
和室・竹(畳14帖)	500 360	700 460	900 460	1,900 1,280
和室・梅(畳12帖)	500 360	700 460	900 460	1,900 1,280
和室・杉(畳10帖)	300 360	500 460	600 460	1,300 1,280
和室・桐(畳8帖)	300 —	300 —	400 —	1,000 —
和室・樺(控えの間)	500 —	700 —	800 —	1,800 —
茶室	400 —	600 —	700 —	1,600 —
能舞台	1,500 —	1,900 —	2,400 —	5,100 —

【展示室】
能装束展、公会堂・能楽堂の歴史写真展を常時開催しています（入場無料）。

【能舞台】

www.otarushiminkaikan.jp

小樽市公会堂

〒047-0024
小樽市花園5丁目2番1号　TEL: 0134-22-2796

© 2007